



<1945(昭和20)年8月15日はもちろん、第二次世界大戦(太平洋戦争)終了の日>

●第二次世界大戦とは、1939(昭和14)年9月1日のドイツ軍のポーランド侵入から、1945(昭和20)年8月15日の日本のポツダム宣言受諾まで、欧・中東・アジア・太平洋全域での世界的規模の大戦争。日独伊などの枢軸国側は9ヶ国、米英仏ソ中など連合側51ヶ国が参戦。死者だけでも4,000万人以上と推定。

●太平洋戦争とは、1941(昭和16)年12月8日の日本軍による米国ハワイの真珠湾攻撃から、1945年8月15日の日本のポツダム宣言受諾まで、主にアジアや太平洋側全域での日米英中蘭間中心の戦争。



朝鮮 大邱(テグ) 釜山 元山 京城 日本 釜山 長崎 東シナ海 黄海 木浦 通化 吉林 元山 プラジゴウ ストック



六十二年目の終戦の日によせて

松本道子

小学六年の時 朝鮮で終戦を迎える

六十二年前の昭和二十年八月十五日の終戦を、小学六年生だった私は、朝鮮の大邱(テグ)の駅長官舎で迎えました。太陽がキラキラ照りつける暑い日だったことを記憶しています。

家族は、大邱駅駅長だった四十八歳の父、四十二歳の母、子どもは男三人、女四人の七人で兄は二歳で亡くなっていたので八人の大家族で、私は次女でした。

三陣に分かれて日本に引揚げ

その終戦の日から慌ただしい雰囲気在家中を充たし、命じられるままに、幼くして亡くなった兄の遺影のある仏壇、七段飾りのおひな様、父の文学全集等を、庭や風呂場で燃やす手伝いをしました。

十月初旬だったと思いますが、私たち家族は朝鮮から日本へ、引き揚げを始めました。父は日頃から朝鮮の人々に親切だったので、幸い襲撃されることもなかったそうです。

第一陣は、女性はアメリカ人に暴行されるというデマがとび、女学校を卒業していた十八歳の姉と、小学五年生の妹の二人が官舎を後にしました。第二陣は、母が生後十ヶ月の妹

を背負い、持てるだけの荷物を手に持ち、その後三年の兄と小六の私と共に、ソクサクを背負ってつづき、朝鮮の方の憐れみの視線を感じながら官舎を後にしました。第三陣は、全ての後始末を終え、十二月に父が引き揚げて来ましたが、第二陣の私たちは、釜山での収容所生活を経て、関釜連絡船にて住み慣れた朝鮮を後にしました。下関港が使用不能というので、山口県の仙崎漁港に接岸されました。その後、山口市のお寺に収容されました。子供だったこともあって、全てもの珍しく、あまり苦痛とも感じなかったと回想しております。ただ、母の疲れが極限に達していたため、兄が妹を抱っこしつづけて歩いたり、私も何かと世話をしていたので、今考えますと、新型爆弾が落とされたという焼け野原の広島を歩いたらしいのですが、記憶としてあまり残っていないのが残念です。

富士山の姿にやっと安堵感を

東海道線の汽車の中は、復員兵で通路まで一杯で、歩くところもない混雑でしたが、静岡あたりで車窓より見えた青空にそびえ立つ富士山の姿に、やっと日本に着いたという安堵の思いで胸一杯になった記憶は、生涯忘れえない思い出の一コマです。

見える田畑や木々を眺めたりして、朝五時に原ノ町駅に降り立ちました。冷たい清々しい朝の空気を肌と感じ、今もその感触を忘れることができません。原町の今の錦町あたりにあった祖父の家の離れに、一家八人の仮住まいの生活が始まりました。

道路も水も電気もない開墾生活

翌年二月、鹿島の父の実家の山を借り、開墾して家族全員で移り住みました。道路も水道も電気もない掘立小屋での生活。朝鮮での生活とは大きな落差もあり、母のストレスは極限に達して、父の顔を見ると罵詈雑言、子供達にも同じで、楽しい家庭生活は皆無に近い状態になってしまいました。

母を恨んだこともありましたが、今考えますと、まず父は生活の水を確保すべきだったと思うのです。家事をする母の苦しみを今あらためて思います。思春期であった私は、ただ黙々と親に従い、丘一つ越えた農家からの水運びや、薪取り、炊事と、母の顔色を見ながらの生活でした。私が枯れ木を一杯背負って帰ってくる時だけ母は笑顔で、「道子は薪取りがうまいね」とほめてくれるのです。

心にも大きな傷を負わせた戦争

女学校へは通わせてもらいましたが、物事を斜めに見る暗い性格に傾いてしま、なかなか友人の中へ入ることが出来ず、心に癒されない傷を負い、全てに無理する自分になり、心から自分を愛しむこともせず、笑いを失った青春。戦火には遭わなかった私ですが、悔いが多く残ってしまいました。このように人の心にも大きな傷を残してしまう戦争だけは避けなければと強く心に思っています。

(裏ページにつづく)

